

## 大豆ミール市場はこうなる

# 知名度をどう上げるか 東穀取の大型商品、大豆ミール

編集部

東京穀物商品取引所（東穀取）は10月11日（木）、大豆ミールの試験上場をスタートさせました。同取引所の上場商品としては、小豆、粗糖、トウモロコシ、IOM一般大豆、遺伝子非組み換え（Non-GMO）大豆、アラビカコーヒー生豆、ロブスタコーヒー生豆に続く、8番目の商品です。

前場1節の初値は2002年5月限（5月決済物）が2万6,690円（1トン）、同7月限が2万6,480円、同9月限が2万6,220円で、出来高は9,181枚（1枚＝50トン）でした。シカゴ大豆ミール相場の水準を映した価格で、無難なスタートだったといえます。

### 供給量は365万ー375万トン

大豆ミールは一般の知名度は極めて低いのですが、市場規模は大きい商品です。搾油用大豆から食用油を抽出した後のかすを加熱乾燥させたのが大豆ミールで、直径2ミリ程度の粒状をしています。国産と輸入を合わせた総供給量（2000年で365万トン）のおよそ90%が家畜用、養殖魚用の配合飼料の原料として使われ、残り10%が調味料原料、食肉加工品、水産加工品用などの食品用です。あまり知られていませんが、牛肉、豚肉、鶏肉、魚肉など各種加工品の“原料”としても使われ、

食卓を支えています。

搾油用大豆からの生産歩留まりは、大豆油が約18%、大豆ミールが約77%です。製油メーカーによる大豆ミールの国内生産量は1990年が284万トン、95年が286万トン、98年が277万トン、99年が288万トン、2000年が285万トンと、この10年間、大きな変動はありません。

一方、輸入量は1990年64万トン、95年85万トン、98年87万トン、99年も87万トン、2000年80万トンと、これも、この5年間は7万トン前後の増減にとどまっています。輸入先は95年ごろまで中国がトップで、その後、米国産が多くなり、98年からはブラジル産も急増しました。しかし、中国国内の畜産需要の拡大によって国内消費が急増したため、98年から中国産の輸入は1万トン前後に激減し、その代わりにインド産の輸入が98年から急増しました。2000年は全輸入量の41%、32万7,000トンを占めています。国産対輸入の比率は、この5年間およそ8対2です。

国産と輸入を合わせた総供給量は、95年が371万トン、98年364万トン、99年375万トン、2000年365万トンと、10万トン前後の小幅な変動です。国内の食肉、食用油生産はこの5年間ほぼ横ばいで推移して、大豆ミールの国内需給面からすると大きな価格変動要因は見

大豆ミール上場でテープカットする取引所関係者



当たりません。

## 需給、為替で大揺れ

ところが、実際には価格は大きく変動してきましたし、今後も揺れは続きそうです。世界の大豆ミール価格の指標となっているシカゴ商品取引所 (CBOT) の1995年からの大豆ミール期近相場を円換算してみますと、95年4月下旬の約1万5,000円から97年5月初めには4万1,000円台に乗り、98年10月初めには1万6,000円台にまで下がっています。

その後、2000年11月半ばまで、ほぼ1万6,000円と2万2,000円の間で推移し、2001年1月にかけて2万5,000円台に上昇、その後、下がったものの5月から反発して7月中旬には再び2万5,000円台へ上がり、10月9日現在では2万2,000円台です。

世界の大豆ミールの生産・消費量は、この10年間、畜産物の需要増によってほぼ一貫して増え続け、1.6倍になっています。この需要増を背景に、世界の原料大豆の作柄・需給、競合たんぱく原料の動向などがシカゴ大豆ミール相場や輸入大豆ミール価格に響き、これ

が為替相場を通して、東穀取大豆ミール相場を動かします。国内の原料大豆と大豆油の需給と価格も影響します。

## 求められる地道な努力

このように大豆ミールはどこからみても、堂々たる大型商品としての資格を備えていますが、「簡単にいってしまえば、シカゴの大豆相場を映すだけではないか」との見方もあります。製油メーカーをはじめとして当業者の上場反対を押し切った形の上場でもあります。個人投資家に商品特性を十分に理解してもらったうえで、産業界、特に当業者に関心を持ってもらうための長期にわたる地道な広報・宣伝活動、セミナー開催などが求められます。

なお、標準品は粗たんぱく質44%以上、水分13.5%以下、粗繊維7%以下、粗灰分6.5%以下の国産大豆ミールです。供用品は米国、ブラジル、アルゼンチン、インド、中国産です。荷姿はサイロ保管品、呼値単位は10円、呼値は1トン、取引単位は1枚50トン、限月は奇数月による6限月制になっています。